

日蓮大聖人御書全集

えんぶだいちゅうごしょ

閻浮提中御書

新版
2047
S
2049

閻浮提中御書

こうあんがんねん

弘安元年(78)

57歳さい

「閻浮提の中に飢餓の劫起こる」。また云わく「また閻浮提

の中に刀兵の劫起こることを示現す」。また云わく「また

閻浮提の中に疫病の劫起こることを示現す」等云々。

人王三十代に百濟國の聖明王、□□□□國にわたす。王

これを用いらずして三代仏罰にあたるべし。釈迦仏を申し隠
すとが□□念佛者等、善光寺の阿弥陀仏云々。上一人より下

万民にいたるまで、皆人迷惑□□。

ばんみん

みなひとめいわく

顕

にちれん

怨

ひと

にちれん

おか

これをあらわす日蓮にあだをなす人はすべて日蓮を犯す。
天はすべてこの国を□□□□二に云わく「経を読誦し書持
することあらん者を見て、軽賤憎嫉して、結恨を懷かん」
等云々。また云わく「多病瘠瘦なり」。第八に云わく「諸
の悪重病あるべし」。また第二に云わく「もし医道を修し
て、方に順じて病を治せば、さらに他の疾を増し、ある
いはまた死を致さん」。また云わく「もし自ら病有らば、
人の救療することなく、たとい良薬を服すとも、しかもま
た増劇せん」等云々。

てん
くに
に
きょう
どくじゅ
しょじ
もの
み
きょうせんぞうしつ
けつこん
いだ
とううんぬん
い
たびようしようしゆ
だいはち
い
あくじゅうびよう
ほう
じゅん
やまい
じ
だいに
い
だいに
い
ひと
くりよう
いた
い
ほか
やまい
ま
いどう
しゆ
もうもろ
みづか
やまいあ
ひと
くりよう
らうやく
ふく
ぞうぎやく
とううんぬん

弘法大師は「後に望めば戯論と作る」と。東寺の一門、上

御室より下一切の東寺の門家は、法華経を「戯論」と云々。

叢山の座主ならびに三千の大衆□、日本国^{うんぬん}の山寺一同に

云わく□□□□大日經等云々。智証大師云わく「法華すら

なお及ばず」等云々。園城の長吏ならびに一国の末流皆云

わく「法華經は真言經に及ばず」と云々。この三師を用い

る國主、終に皇法尽き了わんぬ。明雲座主の義仲に殺され

し、承久に御室思^{おも}い死にせし、これなり。

願わくは、我が弟子等、師子王の子となりて、群^{ぐん}狐^こに笑わ

ねが
わ
でしどう
しそう
こ

じようきゅう
つい
おうほうつ
お

じくしゅ
およ
およ
とううんぬん
おんじょう
およ

ほけきょう
だいしゅ
にほんこく
さんじいちどう

おむろ
しもいっさい
とうじ
もんけ

のち
のぞ
けろん
な

こうぼうだいし

のち
のぞ

けろん
な

とうじ

いちもん

かみ

かこおんのんごう このかた にちれん しんみょう
るることなかれ。過去遠々劫より已來、日蓮が「とく身命を
捨てて強敵の科を顯す師には値いがたかるべし。国王の責
めなおおそろし、いおうや閻魔のせめをや。日本國のせめは
水のごとし。ぬるるをおそることなかれ。閻魔のせめは火
のごとし。裸にして入るとおもえ。

みず 濡 怖 怨 責 難 あ
猶 恐 況 えんま 責 にくおう せ
みだか い えんま 責 にほんこく 責
はだか 思 ひ えんま 責 い
ひと だいねはんぎよう もん こころ ぶつぱう しん こんどしようじ 離
大涅槃經の文の心は、仏法を信じて今度生死をはなるる
人の、すこし心のゆるなるをすすめんがために、疫病を仏
のあたえ給う。はげます心なり、すすむる心なり。
日蓮は凡夫なり。天眼なければ、一紙をもみとおすこと

にちれん ぼんぶ てんげん いっし 見 通

しゅくめい

さんぜ し

なか

なし。宿命なれば、三世を知ることなし。しかれども（中

けつ きょうもん にほんこくななひやくよきい ぶつげん るふ 様 はつしゅう じつしゅう

にちれん にくげん

欠）この経文のことく、日蓮は肉眼なれども、天眼・宿命

にほんこくななひやくよきい ぶつげん るふ 様 はつしゅう じつしゅう

てんげん しゅくめい

きょうげん

□□□日本国七百余歳の仏眼の流布せしよう、八宗・十宗の邪正、漢土・月氏の論師・人師の勝劣、八万・十二の仏經

しちゅ 粗々 推知

わ ちよう ぼうこく

の旨趣をあらあらすいもし□□我が朝の亡國となるべき

勘

ふけい

こと、先にこれをかんがえて、あたかも符契のことし。こ

みなほけきょうおんちから こくしゅ ざんしんとう きょうげん

れ皆、法華経の御力なり。しかるを、国主は、讒臣等が凶言

思

ほんぶ

どうり

をおさめてあだをなせしかば、凡夫なれば道理なりとおも

納

たい

ここる

怨

たびたび

怨

えて、退する心なかりしかども、度々あだをな□□。

びしょく

納

ひと

ちから

さんりん

交

そうちら

ほんぶ

寒

しの

ねつ

候いぬ。されども、凡夫なれば、かんも忍びがたく、熱を

防

もふせぎがたし。食ともし、表□目が万里の一餐忍びがた

じき
乏

ばんり
いつさんし

どきよう
こえ
た

く、思子孔が十旬の九飯堪うべきにあらず。読経の音も絶
えぬべし。觀心の心おろそかなり。

おん
訪

ごと

しかるに、たまたまの御とぶらい、ただ事にはあらず。

きょうしゅしゃくそん

おん
勸

か
こしゅくじゅう

おんもよお

教主釈尊の御すすめか、はたまた過去宿習の御催しか。
かたがたしじょう
がた
きょうきょうきんげん

方々紙上に尽くし難し。恐々謹言。